

タッチの新しいケータイは最新型のスマートフォン。番号のボタンとかはついていなくて、大きな画面を指でタッチして操作するケータイだ。ぼくのまわりで使っているのは塾の先生くらいで、同級生で持っているのはたぶんタッチ一とりだけ。その画面をのぞきこむと、そこにはインターネットの検索サイトが映っていた。

「こうすればパソコンみたいにネットを使うこともできるし」おお、とぼくらのおどろきの声。「こんなふうに音楽を聞くことだってできる」おおお、とぼくらの感心の声。

それだけじゃないぜ、とタッチは続ける。タッチが何度か画面をタッチすると、見たことのあるゲームのタイトルが表示されて、タッチの指を追いかけるように、主人公のキャラクターが走り出した。

「すっげえな！ おれにもちょっとやらせてくれよ！」

「いいけどガミ、手はきれいな？」

ガミがズボンでのごしごしと手をぬぐって、タッチからケータイを受け取った。それからおそろのおそろ画面をさわって、「すげえ！」とまた歓声をあげる。

ガミといっしょになって目を輝かせていたミノルが、うらやましそうにタッチに言った。

「いいなあいいなあ。すっごく高かったんじゃないの、このケータイ」

「そんなたいしたことないって。なんかキャンペーンとか

で普通のやつより安いわれたし」

そう答えながらもタッチは自慢げだ。ぼくもケータイとは思えないきれいなゲーム画面にびっくりしてから、ふと気になってタッチに聞いてみた。

「でもこれさ、先生に見つかったら怒られるんじゃない？ つまりパソコンとゲーム機を学校に持ってきてるようなものでしょ？」

「固いこと言うなよ。これはあくまでケータイだって、ケータイ」

「ったく、ノドカは相変わらずマジメだよなあ」

ガミのあきれたような声に、ぼくは苦笑いで頭をかいた。タッチのスマートフォンはガミからミノルの手にわたって、最後にぼくにまわってきた。

へえ、ほんとに指でなぞったとおりに動くんだ。なんて感心していると、タッチが言った。

「なんならこのあと、うちに遊びにくる？ ほかにいろいろ見せたい機能とかあるんだけど」

「おっ、行く行く！」「ぼくも行きたい！」

ガミとミノルがほとんど同時に返事をする。「ノドカは？」と聞かれたぼくは、ちょっとだけなやんでから、ケータイをタッチに返して答えた。

「ごめん、ぼくはやめとくよ。明日の塾の宿題がまだ終わってないから」